

## 〈北斎展余滴〉馬円とその門人たち

昨秋10月30日から12月9日にかけて、特別展「北斎—風景・美人・奇想—」が開催された。当然のことながら、北斎の多彩な魅力を多くの方々に楽しんでいただくことが一番の目的であったが、当館で開催する意義を考へて、大坂と北斎の関係について様々な角度から検証し、「特集 大坂と北斎」のコーナーを設けて紹介することにした。実際のところ、一般の鑑賞者の方々にどれほど興味を持っていただけたかはわからないが、担当学芸員としては、両者の意外な結びつきを知ることで、北斎をより身近に感じていただけたのではないかと考えている。

この特集では、大坂ゆかりの北斎の弟子たちについても紹介した。来坂した江戸の弟子たちや、大坂で活躍しながら北斎に入門した絵師たちなどである。ここではそれらの弟子のうち、大坂と北斎の関係について考えるうえで興味深い存在である、一峯斎馬円という絵師について注目してみたい。

馬円については不明なことが多く、生没年も明らかにされていないが、文化年間(1804~18)に読本などの版本挿絵を多く手掛けたことが知られている。先述の展示では、『伊達模様 和漢乃染分』という読本の挿絵を紹介するに止まったが、この他にも馬円は北斎譲りの緻密で劇的な挿絵を数多く残している。例えば、図1は『おさん茂兵衛 宗像暦』という読本で、筑紫長六が主君の仇である桂一家を滅ぼす場面の挿絵である。「千畳敷」と呼ばれる大広間で多くの人々が毒を盛られて苦しむ光景が、読本の小さな画面に所狭しと描かれている。かなり残酷な場面で申し訳ないが、多くの人々が入り乱れる複雑な場面を破綻なく細部まで描く、馬円の確かな腕前が十分に窺われる挿絵である。このように現代の我々の眼にも刺激的な挿絵は、波乱万丈な読本のストーリーを盛り上げるのに十分なものであったろう。

とりわけ馬円が興味深いのは、江戸で北斎に弟子入りしながら、ある時期に大坂へ移住し、大坂で活躍したと伝えられるところである。江戸の出来事や風俗などを記した『武江年表』においても、読本挿絵をよく描いた上方の絵師の一人としてその名前が挙げられている。馬円の作品を網羅的に調査したわけではないが、北斎の画風を基本としながらも、上方の役者絵のようにあくが強い個性的な面貌表現が見られる挿絵もあり、大坂へ移住した馬円が頑なに北斎の画風を守るのではなく、場合によっては上方の画風も柔軟に採り入れていた様子を窺うことができる。

さらに注目したいのは、馬円の弟子たちの存在である。図2は、先にも挙げた『おさん茂兵衛 宗像暦』という読本の口絵(目次)だが、その画面向かって左下には「馬圓門人寄合書」と記されている。これにより、馬円の弟子たちが描いた絵であることがわかり、画中のサインから「寄松」「子鈴」「鞍圓」という三人の弟子の名前も判明する。ちなみに、このうち寄松は俗称を菊多松兵衛といい、『戌年 俄



図1 馬円画『おさん茂兵衛 宗像暦』巻之三 挿絵 国立国会図書館蔵



図2 馬円門人寄合書『おさん茂兵衛 宗像暦』巻之一 口絵 国立国会図書館蔵

選』という俄狂言集に馬円との寄合書の挿絵を二点描いている。また、同じく『おさん茂兵衛 宗像暦』巻之三には、画中画の襖絵に「馬圓社中 胡夕画」と記された挿絵もあり、「胡夕」という弟子がいたこともわかる。つまり、一つの読本から四人の弟子の存在が確認できるわけである。馬円にはこの他に弟子がいたことも指摘されており、複数の弟子を抱えるほどの人気絵師だったことが理解される。

このように大坂で人気を博した馬円だが、残念ながら現在にまで伝わる情報はわずかであり、今後の課題とすべきことも多い。馬円と同じ「一峯斎」を名乗り、大坂で文政から天保頃に活躍したと考えられる狩野派の絵師との関係もその一つである。両者が同一人物と考えるのは難しいが、何らかの関係がある可能性も捨てきれないだろう。以上、かなりマニアックな話になってしまい恐縮だが、馬円やその弟子たちについて明らかにすることは、北斎と大坂のつながりについて知るうえでも大きなヒントを与えてくれるのではないかと考えている。

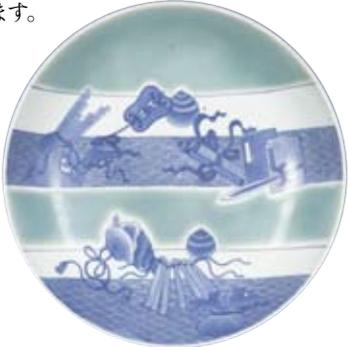
(秋田達也)

## ●コレクション展

### 吉祥の意匠

2013年12月21日(土)―12月27日(金)  
2014年1月5日(日)―2月11日(火・祝)

松竹梅、鶴亀、七福神、宝尽くしなどの意匠は日本の吉祥図案として知られています。今回の展示では、お正月の時期にあわせて日本・中国・朝鮮半島の陶磁器・漆器などに描かれた吉祥図案をご紹介します。



青磁染付 青海波宝尽くし文皿 鍋島焼・盛期鍋島  
江戸時代 18世紀初期 本館蔵(田原コレクション)

### 明末清初

―動乱期を生きた文人たち―

2014年1月10日(金)―2月11日(火・祝)

1644年の甲申の変により270年余り続いた明王朝は崩壊、満州族の清王朝による支配が確立します。この政治的・社会的・民族的動乱期の前後には、江南を中心に発達した都市それぞれに独特の書画が生まれ、文人たちは個性あふれる作品を作りだしました。



黄道周(1585-1646) 松石図 明時代 17世紀  
本館蔵(阿部コレクション)

### 仙人十色―ユニークな仙人たち―

2014年1月10日(金)―2月11日(火・祝)

世俗を離れて山中に住み、不老不死の法を修め、神変自在の術を得た仙人。そのユニークな姿は、日本でもしばしば絵画化されてきました。近世から近代の絵師が描いた仙人たちをご紹介します。



森川曾文(1847-1902) 蝦蟇仙人図  
明治 19世紀後半 本館蔵(高津満氏寄贈)

### 大阪の南画

―近世から現代まで―

2014年1月10日(金)―2月11日(火・祝)

大阪では、18世紀中頃から福原五岳や岡田米山人ら個性豊かな絵師が活躍し、近代に入っても矢野橋村や水田竹圃らが独自の南画を発表しました。大阪で花開いた南画の世界をご紹介します。



水田竹圃(1883-1958) 幽谷早春  
昭和18年(1943) 本館蔵(住友コレクション)



三代永徳齋(1865-1941) 男雛・女雛  
昭和 20世紀前半 個人蔵

### おひな様をかざる

―丸平と永徳齋―

2014年2月22日(土)―3月23日(日)

3月3日は上巳の節句にあたり、雛人形をかざり女の子の成長を祈ります。雛祭りの季節にあわせて、京都の「丸平」大木平蔵、東京の永徳齋という東西の名匠による明治末～昭和初期に製作された雛人形を陳列いたします。



色絵 毘沙門亀甲桐文皿 鍋島焼・盛期鍋島 江戸時代  
17末-18世紀初期 本館蔵(田原コレクション)

### 色鍋島・藍鍋島

2014年2月22日(土)―3月23日(日)

鍋島藩窯の収集品である田原コレクションから、初期鍋島・盛期鍋島・後期鍋島の色絵と染付・青磁を展覧します。鍋島焼は、徳川幕府や有力な諸大名・公家への贈答品として、鍋島藩が採算を考えずに特別な窯で焼造した陶磁器です。和様の意匠による精緻な名品の数々をお楽しみ下さい。

### ちいさな蒔絵

2014年2月22日(土)―3月23日(日)

香合・香箱・菓子器など、愛らしい小さな器には動物や楽器の形を象ったものもあります。蒔絵の小さな器は海外でも好まれ、江戸時代から輸出されていました。カザールコレクションを中心に蒔絵の小品を展示いたします。



蒔絵螺鈿 琵琶形香合  
明治 19世紀  
本館蔵  
(カザールコレクション)

### 近代の美術―日本画と陶磁器―

2014年2月22日(土)―3月23日(日)

昭和11年の開館以来、購入だけでなく、多くの方々からの寄贈や寄託により、近代美術の優品が収蔵されてきました。それらのうち、関西で活躍した日本画家と陶芸家の作品を中心にをご紹介します。



谷口香橋(1864-1915) 淀君 明治 個人蔵